

# 宮古の地機について

仲間 伸恵（宮古織物研究会員）

## 1. はじめに

宮古に高機が導入されたのは明治41年のことである。

では、それ以前の宮古では、どのような織り機でどのような布を織っていたのだろうか。人头税・貢納布の時代にも、上布（苧麻布）に限らず芭蕉布も綿布もすべての織物は地機で織られていたはずである。それはどのような地機だったのか。

現在、宮古上布はすべて高機で織られている。一般的に、高機は地機の進化したものと捉えられる。それゆえ、今さらなぜ地機なのかと疑問に思われるかもしれない。しかし、「地機は経糸に無理な力をかけずに織れるので、糸に優しく苧麻糸に合っているのではないか」「地機で織った着物と高機で織った着物では、着心地がまったくちがうらしい」等、地機で織った布にも様々な魅力があるらしい。

大量生産をめざした時代とはちがう今だからこそ、「地機織り」も宮古の織物の新たな可能性のひとつとして捉えることができるのではないだろうか。

長い年月、先人たちがその暮らしのなかで育て受け継いできた宮古の織物の歴史を、「地機」という視点から見直してみたら何がみえてくるだろう。

このような興味から、宮古の地機と織物について調べはじめた。

## 2. 地機とは

地機（腰機）は、織り手の腰に経糸を固定して経糸張力を身体で調節しながら織る構造の手織り機で、高機は経糸が織り機自体に固定されている手織り機である。

高機は沖縄では明治期（宮古は明治41年）に導入された織り機であり、それ以前は地機（腰機）が使われていた。

現在、多くの手織り物は高機を使って織られている。



地機

（八重山蔵元絵師画稿集より）



高機

### 3. 宮古の地機

旧上野村農業資料館、宮古島市総合博物館、多良間村ふるさと学習館、池間島等に、地機および地機関連とみられる機道具類が残されている。

○宮古の地機の特徴＝丸太型経巻き具

宮古の地機の最大の特徴は、丸太状の大きな経巻き具である。

経糸を巻き取り、機枠にのせるための道具である経巻き具(宮古ではマキダと呼ぶ)が、丸太のような形状をしている。



旧上野村農業資料館の地機  
(マキダが丸太型)



石垣の地機 (マキダはH型)

一般的な地機では、経巻き具の形状は両端が幅広になった板状、あるいは棒状である。ところが、旧上野村農業資料館の地機ではでいご材の丸太型になっており、宮古島市総合博物館の地機には電柱を廃材利用したと思われる杉材の大きくて重い丸太が使われている。

博物館には旧上野村の地機のものに似た、でいご材の丸太型マキダ1個も所蔵されており、池間島でも同じようなマキダが確認されている。



宮古島市総合博物館のマキダ



旧上野村のマキダ



池間島のマキダ

### ○宮古の地機についての聞き取り

宮古の地機を調査して丸太型の経巻き具を見つけたことは、織り手の側からみると途方に暮れる発見でもあった。なぜ、マキダ（経巻き具）をこんな形にする必要があったのだろうか。すごく扱いにくそうで織りにくそうに思えるのだが…。丸太型のマキダが本当に使われていたのか。なぜこのような大きな重いマキダを使ったのか。なぜ宮古にだけこのようなマキダがあるのか。様々な疑問を持ちつつ、多良間、平良、狩俣、砂川、友利で聞き取りを行った。

その結果、たしかに宮古では丸太型のマキダが使われていたと思われる。

- ・小6のとき、地機で木綿の反物を初めて織ることになったが、足でうまく綜統の開口ができずお姉さんが織った。マキダは大きな丸太だったと覚えている。綜統は手にかけて織っていた。中2の頃から上布を織り始めた。それまでは木綿の縞。当時は地機が多かった。  
(大正4年生、女性、平良)
- ・昭和10年頃には地機があった。小さい頃(昭和10年頃)、お母さんの姪が地機を織っていた。  
(大正14年生、女性、多良間)
- ・10年程前までは、おばあさんの地機が残っていたが今はもうない。マキダは大きかったと思う。  
(大正13年生、女性、狩俣)
- ・小さい頃に大きなマキダの地機をみていた。  
(昭和14年生、女性、砂川)
- ・母や近所の人が地機使用。本人も20歳頃まで(お嫁に行くまで)地機を織っていた。マキダは丸太状で大きかった。糊はイモクズと粟の皮を使った。  
(大正15年生、女性、友利)

### ○宮古地域に残る地機関係資料類

- ・旧上野村農業資料館

地機2台(内1台は本体木枠のみ) / 箆がまち・刀杼数点



地機 (マキダはでいご材)



地機の枠



箆がまち・刀杼

・宮古島市総合博物館

地機 1 台 (1979 年狩俣より寄贈、綿の経糸が巻かれた状態)

丸太型経巻き具(マキダ)1 コ / H型経巻き具 1 コ

箆がまち・刀桴多数 / 地機用箆 1 枚



地機



丸太型マキダ・H型マキダ



箆と箆がまち・前がらみ・腰当



刀桴



箆がまち



地機用箆

・池間郷土資料館



丸太型マキダ



刀桴



はねき・まねき (破損)

・多良間村ふるさと学習館

地機 1 台 (※経巻き具はH型巻板) / 箆がまち・刀桴多数



地機 (※経巻き具はH型)

#### 4. これからの課題として

##### • 丸太型マキダによる試織

宮古の地機の経巻き具（マキダ）はなぜ丸太型でこんなに大きいのか。これについては実際に織ってみるしかないようである。宮古織物研究会では現在、宮古の地機を再現して実際に織ってみる試みをはじめている。まずは地機で織る基本的な技術を習得し、宮古の丸太型マキダでの試織をしていくなかで、このようなマキダを使った理由を探ってみたい。

##### • 地機織りの可能性を探る

地機で織った布は、柔らかく風合いの良い布になるというが、はたしてどうなのだろう。過去を解き明かすだけでなく、「地機織り」の技術で、未来の宮古の織物に新しい可能性をひとつ加えることができないだろうか。

##### • 宮古の織物調査

宮古地域には、ここで織られた古い織物の現物や資料があまり残されていない。地機で織っていたような古い時代はもちろん、島を支える産業となり、たくさん織られた宮古上布も、島ではあまりみることができないのはとても残念なことである。

今後、現在残されている貴重な資料の調査、聞き取り、文献や画像データの収集などを急ぎたい。そして、先人たちの残してくれたものから多くを学び、未来へ繋げていけたらと思っている。



宮古島市総合博物館収蔵の地機を再現

#### 〈参考文献〉

- 柚木沙弥郎監修、田中清香・土肥悦子共著、1990『図解染織技術辞典』理工学社
- 田中滋・堀久美子・川島玲子編、2005『織の海道用語解説』織の海道実行委員会
- 柳悦州、2005「沖縄の天秤腰機と紋織の復元」『沖縄芸術の科学、第17号』  
沖縄県立芸術大学附属研究所紀要
- 1993『八重山蔵元画稿集』石垣市立八重山博物館